

## 少年

果てしなく改札口からなだれ込む雑踏を  
見つめる少年の背は  
流れる人々の腰ほどしかなく  
その傍らにうずくまる短足の犬とともに  
人波に埋もれて見え隠れする

切符を集める駅員は時折り  
その犬を振り返っては辺りを見回す  
駅長が怒鳴り込んで来はしないかと  
いたいけな少年を追い出しはしないかと  
雑踏に蹴飛ばされはしないかと

「今日はこんなことがあったんだ」  
ただそれを言うために  
そして頭をぼんと叩かされたために  
一分でも早く父に会うために  
少年は改札口を見つめている

それは伝説になっていたろうか  
そんな少年の想いなどは  
それは感傷にすぎなかったろうか  
それを見つめる僕の心などは  
それは抒情にすぎなかったろうか

(1986.7.9)